メープルレター（１０７）

雨のち雨

この時期には、日本の紫陽花が咲く風景を懐かしく思いだします。こちらは、どうしたことか、今年は、すっきりしない気候が続いています。時折、晴れて涼しく、鳥がさえずる夏になるのですが、雨、雨、雨の日が続いております。傘を持たないと出かけられなくなりました。

５月の最後の日には、孫娘のダンス教室の発表会がありました。５－６歳の幼児クラス、小学生のクラス、１３－１８歳の青少年クラスの子供たち（主に女の子）達が日頃のレッスンの成果を発表します。これが、うまい。。。ほぼプロのように踊るのです。このまま、有名歌手のバックダンスができそうです。しかも、２日に渡り、２度の公演をしました。先生達も若く、このモントリオールにこれほどダンスに情熱を持つ人達がいるとは考えてもみなかったのですが、高度なダンスを海外でもマスターし、ここで子供たちを指導し、舞台で楽しそうに一緒に踊っていました。

「わあー、必死で、あの子も踊ってる。。。」

マダム田中もドリトル先生も楽しく踊る孫娘に拍手喝采でした。久々にアドレナリンがでてきそうです。

会場の入り口には、花束を売るコーナーがあり、出演者にあげるようです。

「これって、ここの伝統だから。」

娘は前日の公演には花を買って送り、当日は、欲しがっていたぬいぐるみを送りました。親子の大事なイベントなのですね。この孫娘も９月から学校にはいります。義務教育ではありませんが、キンダーガーデン、日本の年長クラスにあたる小学校前の教育です。このまま同じ小学校に入ります。

６月始めにマダム田中は、久しぶりに、コメンテーターとアシスタントと一緒に二人のデモンストレーターで日本総領事館公邸で、各国外交官夫人たちのグループにいけばなのデモンストレーションをしました。日本の文化を楽しく、美しく紹介し友好関係を計るものです。最後に参加者の中から一人を選び、ワークショップをして、いけばなを実践してもらうサプライズも企画しておきました。このサプライズワークショップは毎回大好評です。経験がない人でも、あーこうすれば、自分の花がいけられるという経験を実践してもらい、いけばなとの距離をちじめてもらうようにしています。簡単に活けやすい理論を最初に説明しておき、一緒に活けてもらいます。

「はい、ここに、これを入れて、次はこれ、この辺には花をいけてみましょう。バチっと思いきり切ってください。」

「わあー、綺麗、私の花？私が活けたの？」

「そうです。素敵でしょう。こうやって活けてみてください。」

「私、最近陶芸を始めたの。自分の器にいけてみるわ。」

「素晴らしい！頑張ってください。」

彼女は、有名なプロのチェリストだそうです。一体どの国の外交官夫人だったかは聞き忘れました。こうしたデモンストレーションの進行は、長年一緒に組んでコメンテーターをしてくれている友人に任せます。いけばなの説明も、質問への応答も、デモンストレーション中の参加者を飽きさせない会話も、活けた花のくじ引き（いくつかは、くじ引きでプレゼント。半分は、公邸に残します）も、ワークショップの人の選出も、彼女がしていきます。これが楽しく、上手にできる人は、彼女以外にはいないのです。これが、私がデモンストレーションを引き受ける条件でした。チームワークでしょうか。高齢や健康の問題もあり、たぶん、これが、私たちの最後のチームワークの仕事になることでしょう。

デモンストレーションの後は、ビュッフェの昼食です。参加者との歓談で美味しく楽しく時が過ぎていきました。お花いっぱい、お料理一杯ですから、参加者は蝶のように、舞いあがっておりました。

「デモンストレーションを楽しませていただきました。これにはどうしてもきたかったのです。日本の方ですか？」

そう話かけてきたのは東洋系の女性でした。

「楽しんでいただけとても嬉しいです。そうです。日本生まれの、日本育ちの純粋な日本人です。ご主人がやはりどこかの国の総領事でいらっしゃるのですか？」

「私が領事です。(多分総領事なのでしょう)。ペルーです」

「そうでしたか。」

「私は、ペルーの日系三世なのです。祖父母の代にペルーに移民してきました。両親も日本人です。私は、全くのペルー人になっているのですが、時折、日本人の血が騒ぎます。頭の隅にある、モラルとかマナーとか、小さなことが時々でてきます。今日はどうしても、いけばなを見てみたかったのです。」

「ご祖父様たちは新天地で大変なご苦労なさったでしょうね。」

「大変だったようです。優しい、努力家の人達でした。」

「領事のご両親は、ペルーを背負う役に就かれていらっしゃる領事をきっと誇りに思っていらっしゃることでしょう。」

「そうだと思います。ここももう少しで離任し、本国に戻ります。仕事は、赴任５年、本国３年のリズムなのです。ここの前は日本でした。」

「領事にお目にかかれ、とても光栄です。」

「ペルーにいつかきてください。」

日本の中にいると、こうした移民の人達が苦労の末に築いてきた大きな功績には触れることは余りありませんが、苦労を重ねながらも、大きな足跡を海外に残してきたのだと、ペルーの領事を通して改めて思うのでした。領事の心の中にあるのは、限りない日本へのノスタルジーでもあり誇りでもあるのでしょう。

そんなこんなの日々のなか、ドリトル先生は、目まいがすると不調を訴え、病院の緊急に行く羽目になりました。ドリトル先生は、ここ半年、薬が変わって以来、体に合わないと言って勝手に薬の量を変えていたのです。マダム田中は、意を決して、それを全てリストアップしてもって同行して行くことにしました。

緊急医は、薬のリストを見、心電図を見てびっくり。看護婦もえーと驚くばかりです。

「不整脈が心配ですね。もっと精密な検査をしてみないと。。お仕事は何ですか。」

「獣医です。」

「薬のドーズを勝手に変えるのは医者だけですよ。知識は時として邪魔かもしれませんね。担当医に相談してからにしないと色々と危険なことがあります。」

と苦笑いをすると、

「もう少し検査をしたり、薬を試してみてみます。もしかしたら、今夜ここに泊まってもらうことになるかもしれません。」

「えー？ただ、軽いめまいが時々するだけなんですが。」

軽い気持ちで変えてきたドーズがこれほど危険な状況を引き起こしているとは考えてもみなかったドリトル先生は、深く反省するのでした。

「それが続くと、この状況からして、脳梗塞をおこしますよ。」

心臓内科医が入れ替わり立ち替わりやってきて、１時間ごとに検査は続き、薬も飲んでみても、不整脈の幅はなかなか変わりません。心身共に疲れ果てたドリトル先生は心電

図を引きちぎってでも、今にも家に帰りそうになってきました。ほぼ半日続いた検査の末、夕方５時頃にやって来た年配の心臓内科医は、

「差し当たって、今のところ、特に危険な状態というわけでもなさそうだから、薬を変えましょう。今度はきちんと処方箋通り飲んでください。命がかかっていますから。」

新しい薬の処方箋を貰いやっと帰宅できました。以来、きちんと薬を飲むようにはなりました。その後の具合はどうですかって？どうにか安定しているようです。

こうしてあわただしく過ぎていった６月も今日はケベックのナショナルデイ。フランス系のケベック州の正当性を祝うお祭りの日です。来週はカナダデイ。カナダの建国記念日になります。これを境に、一気にバカンスムードになっていきます。子供たちも、次男は日本へ家族旅行。娘は義両親のシャレ―でバカンス。子供たちのバカンスは、マダム田中には忙しい時期になります。猫のお預かりの時期になりますから。

長男はというと、前妻が新しいパートナーと暮らすため、子供たちもつれて遠いど田舎に引っ越すことになり、思いもかけず、子供たちと遠くはなれて暮らすことになったようです。疲れ果てた声で電話がかかってきました。子供たちの教育費も雑費も９０％は支払っているにもかかわらず、子供たちはどんどん遠くなっていくのは辛いようです。１５歳になる孫息子は、友達と別れ、気にいっていたアルバイトもやめ、母親の幸せのため、見知らぬど田舎に移り住むことになります。

「自分一人じゃ動けないから。。。パパともあまり会えなくなるし。。」

寂しそうにそう言っていたと長男は電話口で涙声で言っていました。

「２年たてば、カレッジだから、ここに戻ればいいんじゃない。車の運転免許もとれるだろうし。。２年後には自分で決めて生きていくような気がする。それまで、勉強はしっかりとしておいて、人生の基礎を作りあげるのがいいんじゃない。少しの間の辛抱かな？」

「そうだね、でも２年は長い。大人になってきて、話もできるようになり、時々二人で食事に行ったり、楽しい時間を過ごせるようになったところだったのに。」

マダム田中は、孫息子の辛さと、長男の辛さを思い、涙がでてくるのでした。離婚、再婚は、本人の幸せとともに、大きなおつりをどこかで払うことになるのかもしれません。